文化 Culture

ブッシュマン調査50年

田中二郎・京都大名誉教授に聞く

人類の原像 所有も権力もなし

アフリカの狩猟採集民ブッシュマン（サン族）を50年間にわたって調査している田中二郎・京都大名誉教授（人類学）が、今年度の大同生命地域研究賞（大同生命国際文化基金主催）を受賞。ウィーンで開かれた国際狩猟採集民会議では、生涯を費やした業績を顕彰する「Lifetime Achievement Award」を贈られた。狩猟採集民を通して垣間見る人類の姿とは？

（大阪文化部 渡辺達治）

「人は、協力して手に入れた物は分け合うが、お金で買うと途端に分けなくなる。ブッシュマンの変化から学んだ」

ブッシュマンと出会ったのは、1966年、独立直後のアフリカ・ボツワナに入った時のこと。1週間から1か月間単位での移動を繰り返しながら、キリンやカモシカなどを狩り、野生のスイカや木の実、キュウリの根を集める。そんな彼らの姿に「見たことのない文化に引き込まれた」と衝撃を受けた。

初めは16か月間、その後も繰り返し通ううちに社会の仕組みが見えてきた。「獲物の肉は、同じキャンプの30～50人で仲良く分ける。実った植物を決して取り合わない」。つまり個人所有の観念がないのだ。さらに「階級がなく、権力を持つリーダーもいない」という。

もちろんメンバー間の衝突もある。その時は一方が別のキャンプに移ることで解決させ、その後、対立がやめば、再び一緒に過ごすことも。人のつながりに柔軟性がある点は、人間関係がこじれがちな現代社会との大きな違いだった。

狩猟採集社会は、700万年とされる人類史のほとんどで主流だった。対する農耕社会が本格的に発達したのは、ここ1万年のこと。そこでは産物の蓄積による所有や権力関係が生じ、それに基づく社会組織が生み出されていった。「人類史全体で考えると、ブッシュマンのような社会や生き方が普通だったとは驚くべきこと」と田中さんは語る。

とはいえ、この半世紀でブッシュマンの社会も国家や市場原理に組み込まれた。定住化が進み、伝統的な狩猟採集は減り、現金収入への依存が高まった。その結果、今では、仕事が不安定で食料の配給に頼る姿さえ見られる。

田中さんは自らのフィールドワークについて、「もし自分が何十歳か若い世代だったら、純粋な狩猟採集文化を詳しく知ることはできなかっただろう」としみじみ振り返る。「人類はかつて、自然の恵みを信じ、食物を分け合い、権力者なしで生きていた。現代社会を反省する鑑とする意味でも〈人類の原像〉を伝え続けたい」

たなか・じろう 1941年京都府生まれ。弘前大教授、京大教授などを歴任。著書に『ブッシュマン、永遠に。』など。

11月5日、陸前高田市のベルトコンベヤー＝筆者撮影

岩手・陸前

そこで失われるものをカバーできるのはかさ上げした盤の上で人の振る舞いに具体的に関わり、記憶をつなぐことのできる建築の役割かも知れないと話し合った。

（建築家、東洋大建築学科講師）

中央公論新社 新刊から

中路啓太さんの本格歴史長編『獅子は死せず』が中公文庫から刊行される。代表作『うつけの采配』で関ヶ原の戦いの知られざる暗闘を浮かび上がらせ、近著『もののふ真迦』では、秀吉の朝鮮出兵で自軍の狼藉を見かね味方に弓を引いた男を描いて「本屋が選ぶ時代小説大賞2015」を満票で受賞した作者。その真髄は、逆境でも絶対に己を貫く男の美学にある。

本作でもその美学は存分に生かされている。大坂の陣で豊臣側についた主人公・毛利勝永が見せた、最後の最後まで勝ちにこだわる戦い方。今を懸命に生きる全ての方に読んでほしい。上下各680円（税別）。